

二葉亭四迷『新編浮雲』のカッコ類符号

半沢 幹一

はじめに

日本語の文字表記史の研究において、補助符号が取り上げられることはほとんどない。表記の中心はあくまでも文字のほうにあるから当然とも言えるが、そもそも近代以前に、符号を用いること自体が決して一般的ではなかったことにもよろう。

近代に入り補助符号が用いられるようになったのは、西洋の句読法の影響とされ、その先駆的な一例として、二葉亭四迷『新編浮雲』(明治20～22年)が挙げられる。早くは尾崎知光(1967)が「表記符号に於ける問題」という節で、『新編浮雲』におけるいくつかの符号を取り上げているが、その後、句読点や会話引用に関わる符号以外に関する研究は、無いに等しい。

補助符号の中心を成す句読点は、文の論理関係を明示するという、文法に関わる機能とともに、氣息などに関わるレトリックの機能も有するとされる。いわゆる表現性ももっぱら後者の機能に関係し、句読点以外の符号は、引用であれ強調であれ、表記主体の意図がテキストのメタレベルで示されるのであって、表現性に特化されていると言ってもよい。

以上をふまえ、今回は、『新編浮雲』における補助符号の中でも、カッコ類を取

り上げる。『新編浮雲』のカッコ類の符号は、カギカッコ(「 」)と二重カギカッコ(『 』)と丸カッコ(())の3種類のみであるが、現代でも一般に用いられているのは、この程度である。また、『新編浮雲』当時の文学系の文章においても、カギカッコはある程度見られるものの、二重カギカッコや丸カッコも併せて用いるのはけっして多くはない。

ちなみに、当時の他の文学作品でのカッコ類の使用状況を見てみると、たとえば、坪内逍遙の『当世書生氣質』(明治18年)には、カギカッコと丸カッコの他に、キッコウカッコ(〔 〕)が見られ、尾崎紅葉の『色懺悔』(明治22年)には、カギカッコの他に、二重丸カッコが会話引用に用いられている。また、『新編浮雲』の最終回(第十九回)が掲載された『都の花』第五卷第二十一号(明治22年)では、カギカッコのみが3作品(流鶯「作花」・嵯峨のやおむる「野末の菊」・橘家かをる「残憾写真俳脚本」)、カギカッコと丸カッコが1作品(美妙「いちご姫」)、カギカッコ・二重カギカッコ・丸カッコの3種類が1作品(藤蔭「藤の一本」)、全く用いられないのが1作品(如雷「骨相観」)、という混乱状況にあった。

小学館辞典編集部編(2007)(以下「辞典」と略す)には、現代のカギカッコ、二重カギカッコ、丸カッコのそれぞれの用

法が、次のように示されている（学術的な、あるいは校正上の特殊な用法は省く。行頭の囲み数字は当該辞典の用法番号を示す）。

〔カギカッコ〕

- ① 他人や自分が話したり書いたりした言葉を文章中に示すときに用いる。
- ② 文中で他の語句と区別して示したい特定の語句を示すときに用いる。
- ③ ④ ⑤ 略

〔二重カギカッコ〕

- ① 他人や自分が話したり書いたりした言葉を文章中に示すときに用いる。
- ② 文中で他の語句と区別して示したい特定の語句を示すときに用いる。
- ③ 「 」の中でさらに引用符を使うときに用いる。
- ④ ⑤ 略

〔丸カッコ〕

- ① 前に記した語句について注記や説明を示すときに用いる。
- ② 文中で、補足や限定のためにある事柄を書き加えるときに用いる。
- ③ 会話文の中で、発話者が注意・補足などのための言葉を差し挟んだ様子を表わすのに使われる。
- ④ 小説・エッセイなどで、他人や自分が話したり書いたりした言葉を示すときに使われる。
- ⑤ 文中で、他の語句と区別して示したい特定の語句を示すときに使う。
- ⑥ 「 」などの引用符の中にさらに

引用符が入る場合に使われる。

⑦ ⑧ 略

これによれば、カギカッコの①と二重カギカッコの①と丸カッコの④の用法、カギカッコの②と二重カギカッコの②と丸カッコの⑤、二重カギカッコの③と丸カッコの⑥が共通している。つまり、この3種のカッコ類の符号において、独自の、しかも多様な用法があるのは丸カッコのみで、他は共通していることになる。もちろん、同じ用法とはいえ、併用される場合は、各々に相違があると想定され、また、明治時代と現代とは異なる用法もあると考えられる。

調査資料としては、全三編を1冊にまとめた『新編浮雲 再版』（国文学研究資料館所蔵、明治24年、金港堂、の復刻、2005年、平凡社）を用い、用例検索にあたっては、同書を底本とした「二葉亭四迷『新編 浮雲』（再版）本文および索引など（2009～2011年度科学研究費補助金基礎研究（C）課題番号21520480代表 半澤幹一）研究成果CD版」を利用した。

1. 『新編浮雲』のカッコ類

『新編浮雲』に用いられたカッコ類の符号、カギカッコと二重カギカッコと丸カッコの3種類の総数および各編の分布数を見ると、次頁の〔表1〕のとおりである（各符号は2つセットではなく、開きと閉じを別々にカウントする）。

この表1から、次の4点が指摘できる。

第一に、『新編浮雲』のカッコ類の符号は、カギカッコがほとんどを占め（約97%）、各編にほぼ万遍なく分布する。ちなみに、句読点（、／。／＼／？／！）の総

〔表1〕カッコ類符号数

	第一編	第二編	第三編	計
「	364	578	201	1143
」	73	81	172	326
小計	437	659	373	1469
セット率	29.3	23.7	82.0	40.2
『	0	0	2	2
』	0	0	1	1
小計	0	0	3	3
（	4	13	6	23
）	3	14	6	23
小計	7	27	12	46
総計	444	686	388	1518

数2598例と比べれば、カッコ類はその6割程度であり、また句読点はその8割以上が第三編に集中するのに対して、カッコ類にそのような偏りはない（半沢幹一（2016）参照）。

第二に、カギカッコは、開きのほうが閉じの3.5倍ほど多く、セットになるのは全体の4割程度であるが、第三編になって急激にセット率が高まる。開きのカギカッコのみの使用が目立つというのは、現代とは大きく異なる点である。

第三に、丸カッコは、開きと閉じが第一編からほとんどセットで用いられている。この点はカギカッコと大きく異なる。

第四に、二重カギカッコはごく僅少で、第三編で初めて見られる。

2. 二重カギカッコ

行論の都合上、用例数のもっとも少ない二重カギカッコから検討する。計3例は以下のとおり（該当符号は太字で示す。漢字の旧字は新字に、変体仮名は現行字体に変え、ルビは略す。引用末尾のカッコ内は、編一回を示す）。

〔例1〕（略）後れ馳せに赤面。「今にお袋

が歸ッて来る。『慈母さん此々の次第……失敗った、失策った。（3-15）

〔例2〕「此間は如何したもンだった？ 何を云ッても、『まだ明日の支度をしませんから』。はッ、はッ、はッ、憶出すと可笑しくなる。」（3-17）

2例とも、「辞典」の〔3〕の用法であるが、〔例2〕のほうは、カギカッコで範囲が表示された文三の発話内にお勢の以前の発話が引用されていることがセットで示されているのに対し、〔例1〕のほうは、文三の発話の中に、予想されるお勢の発話の始まりだけが二重カギカッコで示されている。想定される終わりの部分は「次第……」で、リーダーによってその表示がされたとも考えられよう。

どちらにせよ、発話内の引用発話が二重カギカッコで示されるのは、この2箇所のみで、しかも第三編になって初めて現われる。それ以前の発話内発話はすべて、カギカッコ表示か無表示かであって、この2箇所だけ二重カギカッコを用いた特別の意図は見出しがたい。ただ、少なくとも押さえておくべきは、翻訳での先例はあるにせよ、『新編浮雲』においてもすでに、ダブルコーテーションマークに相当する符号として二重カギカッコが当てられ、用いられたという事実である。

3. 丸カッコ

次に、丸カッコのうち、単独使用の2例を初めに見ておく。

〔例3〕アノ本田さんは（此男の事は 第六回に委曲しく）どうだツたエ （1-5）

〔例4〕（略）円く納まる事だから此時文三はフツト顔 振揚げて不思議さ

うに叔母を凝視めた)ト思ッてチ
ヨイとお聞き申したばかりサ(2-
11)

〔例3〕は開きの丸カッコのみで、「委曲しく」までが挿入されていることが明らかなのは、この部分が小字2行の割書きになっていて、しかも直後に1字分の空白があるからで、閉じの丸カッコがなくとも、そこに切れ目があることは察せられる。対するに、〔例4〕は閉じの丸カッコのみで、その始まりは「此時」であるが、直前に空白がないので、開きの丸カッコがないと、挿入がどこからかは分かりにくい。あるいは、製版の際にたまたま誤脱が生じたのかもしれない。

丸カッコの用法について、先掲の尾崎知光(1967)は、①語句の注釈、②登場人物を説明したもの、③その場の情景を説明したもの、④前後関係を指示したもの、⑤作者の立場から人物を批判し、意見を加えたものの、5つに分類して(pp81-84)、〔例3〕を④、〔例4〕を⑤の例として挙げている。「辞典」の分類と照合すれば、①と①、②・③と②、④・⑤と③がほぼ相当し(ただし、③が「会話文」に限定される点は④・⑤と異なる)、④～⑥の用法は、『新編浮雲』には見られない。④～⑥の用法が無いということは、それらはカギカッコあるいは二重カギカッコが担い、丸カッコとは用法が区別されていたということである。

①～⑤に相当する表現そのものは近代以前にも見られ、とくに④や⑤は語り手がテキスト表面に現われる、いわゆる草紙地として、近代以前の物語を特徴付けるものにもなっている。ただ、近代と異なるのは、それが表記上、他の部分と区

別されず渾然としていることである。それはそれでのメリットもあったろうが、丸カッコという符号の使用は、テキストの位相を識別し、文脈を明確化する方向に転換する意図を示していると言えよう。

『新編浮雲』における丸カッコの22セットを、上記分類にあてはめると、①が9例、②～⑤が各2例となり、①の用法が半分近くになる。

①に該当する9例のうち7例は、「「アイドル」^{ほんぞん}」(2-7)のように、英単語あるいは英文の意味を示す場合であり、残り2例は「くらみ(暗黒)でるのが」「わかッ(分ら)なッかえッ?」(ともに3-14)で、お勢の発話内の仮名表記の語の意味を示している。

②の登場人物を説明する例としては、〔例5〕弟を勇と言ッて(略)是れも(略)湾泊盛り(是れは当今は某校に入舎してゐて宅には居らぬので)トいふ家内ゆ系(1-2)

があり、③のその場の情景を説明する例としては、お政の話す様子を示す、次の例がある。

〔例6〕「三方四方」ト(言葉に力瘤を入れて)円く納まる(2-12)

この他に、じつは、上記5分類には収まらない用法が5例ある。第二編第十回の、以下の場面のみに一連の表記として見られる。

〔例7〕(昇)ヲヤ此様な悪戯をしたネ
(勢)アラ私ぢや有りませんよアラ鍋ですよホヽヽヽ
(鍋)アラお嬢さまですよオホヽヽヽ
(昇)誰も彼も無い二人共敵手だ

ドレまづ此肥満奴から
(鍋)アラ私ぢや有りませんよ
オホ、、、アラ厭ですよ
…………アラー御新造さアん引

この場面では、発話の開始表示の開きのカギカッコがなく、発話者名が改行ごとに丸カッコで示されている。このような示し方は『新編浮雲』の他の部分には見られない、前代の洒落本の体裁に準じたものであって(鍋の2回目の発話最後の、長音化を示す「引」の小字表記も関連)、近代小説のスタイル一般には認められない。にもかかわらず、ここだけに、あえて用いたのは、丸カッコ付きで発話者名を明らかにしつつ、昇とお勢やお鍋とのじゃれ合いを、廓遊び的な雰囲気を表そうとしたからと考えられる。

4. カギカッコ：強調表示

最後に、『新編浮雲』のカッコ類の符号のほとんどを占めるカギカッコを取り上げる。

カギカッコが開きと閉じのセットで用いられたうち、発話を示す以外は、すべて文中で特定の語句を目立たせたる場合、つまり「辞典」の②の用法であり、50例、見られる。カギカッコのセット総数が295例であるから、2割弱となる。

カギカッコで目立たせる対象となった語は外国語に多く、33例あり、全体の7割近くを占める。複数例を示せば(／の右が回数)、「アイドル」(2-7/3)「いりりゆうじよん(す)」(3-19/2)「おぶちかるいりりゆうじよん(おぶちかる、いりりゆうじよん)」(3-19/2)「クラツス」(2-9/3)「コツプ」(2-10/2)「スコツチ(1-1/2)・タイムス(たいむす)

(2-8・3-13/2)「ナシヨナル」(1-6/3)「フオース」(1-6/3)「ボート」(2-9/3)などである。

ただし、『新編浮雲』に用いられた外国語のすべてがカギカッコ付きで表記されるわけではない。たとえば、アルファベット表示の英単語や英文には付かないし、「越歴・襦袢・拿破崙・仏蘭西・羅紗」や「骨牌・洋袴・摺附木・犠牲・圧制家・利己論者・列国史」のように、音訓どちらにせよ漢字が当てられた語にも付かない。カタカナ表記でも「シャツ・ハンケチ(ハンカチーフ)・ペンキ・レモン」のように、当時であっても日常生活語化していたと見られる語にも付かない。「さるれえ(サルレー)」や「はっぱアと、すぺんさあ」のような、仮名表記された外国人名には、カギカッコではなく、傍線が付されている。

つまり、単に外国語だから自動的にカギカッコを付すということではなく、それぞれの文脈において、一般には馴染みが薄いなどの理由により、カギカッコを付して際立たせる必要があると認められた語句に、外国語が多かったということである。

外国語以外の語句は16例あり、とくにカギカッコが必要だったと判断されるものに、

〔例8〕「シテ見れば大丈夫かしら……………ガ……………／とまた引懸りが有る、まだ決徹しない、文三周章て、ブル／＼と首を振ツて見たがそれでも未だ散りさうにもしない此「ガ」奴が、藕糸孔中蚊睫の間にも這入りさうな此眇然たる一小「ガ」奴が眼の中の星より

も邪魔になり地平線上に現はれた
砲車一片の雲よりも畏ろしい(2-
8)

の「ガ」がある。これは、接続詞の「ガ」であって、そもそもカギカッコ表示がないと、擬人化された語としての識別・取り立てが困難である。また、

〔例9〕(略) 文三の胸には虫が生た、(略)
虫奴は何時の間にか太く遅しく成
ツて「何したのぢやアないか」ト
疑ツた頃には既に「添度の蛇」と
いふ蛇に成ツて這廻ツてゐた……
(1-2)

のように、「添^{そひたい}度^{ぢや}の蛇」という、言葉遊び的な比喩語として示すためにカギカッコが付されている場合もある。

その他は、「人の頭の蠅を逐ふよりは先づ我頭のを逐へ、」(3-16) のような諺、「殿様風」(1-6)「日本の」(2-7・2-8 / 2) のような、いわゆるの意、「方々」(2-8)「忠告」(2-10) などのような、当該文脈における反復あるいは強調などを

示すのに用いられている。

5. カギカッコ：発話表示

発話を示すカギカッコを取り上げる。ここで言う「発話」は、外的な発話いわゆる会話文だけでなく、内的な発話としての心話文、発話内における第三者の発話の引用も含む。初めに断っておくが、『新編浮雲』における、広い意味でテキストに引用される発話のすべてが符号で表示されているわけではない(たとえば、例8)。ただし、表示される方が圧倒的に多く、しかもその符号はカギカッコだけであるが、現代では一般的な、開きと閉じのセットだけではなく、開きのみ、閉じのみ、という場合もある。

それらによって表示された発話の総数は1099例で、そのうち開きのみが838例(76.2%)、セットが245例(22.3%)、閉じのみが16(1.5%)となっていて、開きのカギカッコのみが全体の四分の三以上を占める。

〔表2〕発話表示符号の種類と分布

第一編	1回	2回	3回	4回	5回	6回	計	
「	23	2	45	71	78	78	297	
「」	2	9	14	10	7	7	49	
」	0	1	1	2	2	1	7	
計	25	12	70	83	87	86	363	
第二編	7回	8回	9回	10回	11回	12回	計	
「	107	39	79	141	41	88	495	
「」	11	11	7	15	9	0	53	
」	1	0	0	0	0	1	2	
計	119	50	86	156	50	89	550	
第三編	13回	14回	15回	16回	17回	18回	19回	計
「	1	20	20	0	3	1	1	46
「」	11	10	27	0	73	13	9	143
」	0	0	1	0	1	2	3	7
計	12	30	48	0	77	16	13	196

これらのパターンの各編・各回の分布は、前頁の表2のとおりである。

この表から明らかなのは、次の3点である（なお、閉じカギカッコのみの発話表示については、用例が僅少でもあり、とくに所見は付さない）。

第一に、各編の発話数は、各編全体のテキストの分量比から見れば、ほぼ同等と言えるが、回ごとに見れば、各編でも落差が大きい。各発話の分量も考慮すれば、その回の多くが発話で占められているのもあれば、発話がほとんど見られない回もある。ただ、それ自体つまり発話量の如何がカギカッコの使用傾向の違いと関係しているとは認められない。

第二に、編ごとに見れば、第一編と第二編は開きカギカッコのみが大勢を占めるのに対して、第三編ではカギカッコのセットが中心となる。ただし、第三編においても、第14回や第15回は傾向が異なっていて、全回一律というわけではない。その意味では、第一編の第2回も例外的である。

第三に、現代に共通する、カギカッコが開きと閉じのセットで発話範囲を示すのは、第三編になって初めてではなく、第一編第一回つまりテキストの最初から、少数とはいえ、現われる。その初例は、〔例10〕「（略）だって何時かもお客様の
みらっしゃる前で「鍋のお白粉を
施けたとこは全然炭団へ霜が降ッ
たやうで御座います」ッて……余
りぢやア有りませんかネー（略）
（1-1）

という、お鍋の発話の中に引用された、お政の発話の表示に見られ、直接的な発話としては、これに続く文三の発話が初

例である。

〔例11〕此時も唯「フム」と鼻を鳴らした
而已で（略）（1-1）

十川信介（2002）「は、「第一・第二篇と第三篇では、かなり大きな相違がある。特に第一篇冒頭の文章などは、句読点による文節化がほとんどなされず、現代の読者から見ると、これが「^マ言文一致体」かと疑わせるほど読みにくい感じがある。これにくらべて第三篇では、句読点のほか会話文の鉤括弧もほぼ整い、白ゴマ点「ゝ」の使用で、さらなる文節化もはかられている」（p503）としたうえで、「第一・第二篇では会話文の受けの括弧がないのが普通だが、これを現在のマニュアルで括弧を閉じてしまうと、この会話の流れの呼吸は、視覚的にも失われてしまうだろう」（pp506-507）という見方を示している。

第三に指摘した点だけに関してならば、このような見方、つまり発話の終りを示す閉じカギカッコの有無が「会話の流れ」のありように関わるという見方も妥当と言えそうであるが、じつはカギカッコの開きのみとセットの違いには、それ以外にも注目すべき点がある。

すなわち、開きのカギカッコのみで示される発話は、その前後で改行されるのがほとんどであり、発話直前あるいは直後あるいはその双方に改行がないのは、838例のうち、わずか36例にすぎず、それらは各編にちらばっている（第一編：9例、第二編：13例、第三編：14例）のに対して、カギカッコのセットで表示される発話のほうは、245例のうち、改行されているのが24例（第一編：2例、第二編：2例、第三編：20例）であって、改

行されないほうが一般的なのである(例11・例12が示すように)。

開きのカギカッコのみで、改行が発話の前後にある例を、各編から挙げる(／が改行を示す)。

〔例12〕(略) 中背の男は不図立止まつて
／「ダガ君の免を喰たのは弔すべく
また賀すべしだぜ／「何故／「何
故と言つて君是からは朝から晩ま
て情婦の側にへばり付てゐるこ
とが出来らァネ、アハ＼／＼／
「フ、ハ、ン馬鹿を言給ふな／ト高
い男は似気なく微笑を含み(略)
(1-1)

〔例13〕(略) 文三がさも＼／苦々しさう
に口の中で／「馬鹿奴……／ト
言ふた其声が未だ中有に徘徊つて
ゐる内に(略)(2-7)

〔例14〕と昇はお勢の傍に陣を取つた。／
「本統にまだ……／「何をさう拗ね
たんだらう? 令慈に叱られたね?
え然うでない。はてな。／と首を傾
けるより早く横手を拍つて／「あ、
あ〜わかつた。(略)(3-14)

つまり、『新編浮雲』における発話は、開きのカギカッコとともに、改行によって、前後の地の文あるいは他の発話と区別され、カギカッコのセットは、地の文あるいは他の発話に埋め込まれる場合に用いられる、というふうに両者は使い分けられていたのであり、閉じのカギカッコ表示がないのは決して不備ではなかったということである。

第三編で急増するセットのカギカッコで表示される発話143例のうち、改行を伴う20例を除く123例は、そのような埋め込まれた発話の表示だったのであり、

それゆえに、改行しないままなので、閉じのカギカッコがおのずと必要とされたのである。

もっとも、『新編浮雲』において大勢を成す開きのカッコのみと改行による発話の表示方式は基本的には、江戸戯作などに見られる方式を引き継いだものであり、ただ符号が山型からカギカッコに変わっただけである。それだけでも、版面のイメージは新しくなったとも言えるが、内実として表記の革新と認められるのは、「会話の流れの呼吸」などとは関係なく、テキストにおける地の文と発話との主従関係の逆転、つまりあくまでも地の文を中心として展開する中に、発話を従の位置付けとして埋め込んだことを明示しようとしたカギカッコのセットのほうである。そして、それはすでに第一編から試みられていたのであった。

おわりに

「近代文章の黎明」(尾崎知光)と呼ばれる、二葉亭四迷『新編浮雲』というテキストは、補助符号の使用という点でも、その名にふさわしいものであり、今回取り上げたカッコ類の符号は、使用するだけでも画期的なものであった。それらの用法の多くは現代にも通じる、テキスト内部の位相差を示すためであり、たとえ相当するテキスト表現の性質が近代以前と大きく変わることがなかったとしても、その位相差を明示することにこそ、新たに用いられた、それぞれの符号が機能することになった。

これは現代から見れば当たり前のことのようにあるが、亀井秀雄(2014)によれば、西洋においても「十九世紀の半ば

に至っても、句読法はまだ十分に規則化される状態にはなかった。それならば印行者に任せてしまおう。そう考える書き手もいた」(p108) とのことであるから、ましてその影響を受けた当初の日本においては、補助符号を用いるにあたって、暗中模索の試行錯誤が繰り返されたのは想像に難くない。

しかも、それは文章の書き手だけの問題ではない。日本で活版印刷が普及し始める明治20年代における出版事情は明らかではなく、元原稿から、割付・文選・植字・校正などの工程を経て、印刷結果に至るまでの、とくに表記に関する最終決定者が誰だったか、定かではない。つまり、『新編浮雲』というテキストには、二葉亭四迷自身の表記意図がそのまま反映しているとは限らないということである。ただし、当時において、カッコ類を含めた補助符号を使用すること自体は、二葉亭の意図抜きには到底、考えられない。

以上に鑑みれば、符号使用の先駆的テキストである『新編浮雲』におけるカッコ類符号は、若干の不徹底さと旧時代性を留めながらも、全編を通じて、ほぼ一貫した新たな方針に基づき用いられていると評価できる。このことは、編を追うごとに言文一致化つまり近代化されているという、『新編浮雲』のテキストに関する通説にも疑問を投げかけよう。

〔参考文献〕

大熊智子(1995)「引用符を用いた会話文の表記の成立」『東京女子大学日本文学』84

尾崎知光(1967)『近代文章の黎明——二葉亭「浮雲」の場合——』桜楓社

亀井秀雄(2014)『日本人の「翻訳」』岩波書店

小学館辞典編集部編(2007)『句読点、記号・符号活用辞典』小学館

十川信介(2002)「『浮雲』の時代」青木・十川校注『坪内逍遙 二葉亭四迷集』岩波書店

半沢幹一(2016)「『浮雲』における白ゴマ点」青葉ことばの会編『日本語研究法【近代語編】』おうふう

〔付記〕

査読の方々から貴重なコメントをいただき、小稿に生かすことができたことに、記して感謝もうしあげます。

(共立女子大学)